

「上部消化管 X 線診断ブレイクスルー」

齋田幸久 著

国立がんセンター名誉院長, (財)早期胃癌検診協会理事長

市 川 平三郎

齋田幸久博士が、またユニークな本を上梓された。心憎いほど気のきいた前著「消化管ベスト・テクニック」(医学書院, 1991)を出版された博士が、今度は別の視点から本書をまとめられたことは、意義が大きい。

別の視点とは何か。それは、前著の出版から6年以上、教育の第一線で学生やレジデントに接して努力して来られた苦悩の結晶ではないか。つまり、博士は、技術の必要性和その技を磨くコツを教えただけではどうにもならない、ということ、その間により実感されたのではないだろうか。

上部消化管 X 線診断というものは、かなり奥が深いもののだが、本書を通読してまず思ったことは、よくぞこれほどコンパクトにまとめたものだ、ということだった。が、同時に、こんなにコンパクトでいいのか、とも思った。でも、よく考えてみると、やはり、これでよいのだ。

そもそも、教育、特に全くの初心者にものを教える場合に最も大切なことは、極めて素朴な疑問にまず明

快に応えることだと思う。誰でも持っている疑問が明らかになると、目が輝いてくる。そして、次を知りたがるようになる。そこが大切なのだ。

私は、かつて母校の小学校で早期胃癌の診断学の「授業」をしたことがある。生まれて初めて見る二重造影の X 線写真を1枚出して、どこに病変がありますか、と質問したら、なんと、小学生が恐る恐る指差した箇所が早期胃癌のところだったのだ。その小学生も狂喜したが、それ以上に私自身が驚いてしまった。この本は、何かそういうところを暗示するような雰囲気を持っている。

内視鏡時代と言われるように、最近の素晴らしい内視鏡の進歩を決して否定するものではないが、それに匹敵する、否、ときにはそれを超える多くの情報を提供するのが X 線診断学だということは、改めて深く考え直すべきだろう。このことは、多くの経験者の深く思っていることなのに、世の中の傾向は、内視鏡のほうが手っとり早いと短絡している風潮が強い。こうなったのは教育が

悪い、とすぐ言われる。しかし、齋田博士のこの本を見ると、何か昔と違う、コンパクトだがスマートな風が吹き流れている。

“読破すれば、その時、君が平均をはるかに凌駕していることをお約束する”と、著者も自信をもって言っている。

X 線診断学の奥の深さを示す一面として、X 線像と病変の肉眼像との丹念な対比が重要なのだが、それにも触れている。とにかく、数多くの写真をじっと見ることの大切さも、更に、最近のトピックスなどで随所に散りばめて、興味をつなげる努力もしている。

“ブレイクスルー”とはよくぞ名づけたものだ。本書は、X 線診断の初心者はもちろんのこと、いわゆる食わず嫌いの人たちも、とにかく、前著とともに、一読することをお奨めしたい本と言ってよいであろう。

● B5 頁120 図62 写真101
1998 定価(本体3,000円+税)
〒400

—医学書院 刊(☎03-3817-5657)